

# モンゴル語学習者に対する効果的な格語尾の指導法研究

## ——表を多用した理解促進の試み——

内田孝 (UCHIDA Takashi)

滋賀県立大学 非常勤講師

### 要旨

モンゴル語格語尾と日本語格助詞の用法には共通性が見られるため、日本語話者にとってモンゴル語が学びやすい言語に属することは事実である。だが、現在モンゴル国で用いられているキリル式モンゴル文字は複雑な正書規則を有するため、日本語話者にとってもモンゴル語格語尾の習得は決して容易とはいえない。モンゴル語文法の指導法に関する研究はこれまで十分に進められておらず、学習書によって文法項目の説明にも差異が見られる。本稿では、モンゴル語格語尾の指導項目を整理した上で、表を多用することで学習者の理解を促進する学習指導の方法に関する試論を提示する。

キーワード：モンゴル語 格語尾 初級文法 正書法 表

### 1. はじめに

本稿で論じるのは、モンゴル語学習者に対するモンゴル語格語尾の教育法についてであり、特に学習者として日本語話者を想定している。日本語とアルタイ諸語の一つに属するモンゴル語はともに修飾語が被修飾語の前に置かれ、語順類型ではSOV型に属する。また、いずれの言語も形態論上は膠着語に分類され、名詞や動詞語幹に接辞(格語尾や活用語尾など)を付着させることで文の文法的意味を示す。本稿で取り上げる格語尾をはじめ、動詞語幹に付着する受身・使役などのヴォイスや過去・非過去などテンスを表わす語尾変化に関する用法や文法概念を対照すると、両言語には類似点が多くみられる。一般に日本語話者がモンゴル語を学ぶ場合、文法概念の詳細な説明を受ける以前に、日本語との異同を確認するという作業を通すことでモンゴル語の基本文法を一層容易かつ正確に理解することが可能となる。例えば、モンゴル語格語尾を学ぶならば、モンゴル語の奪格「-aac<sup>4</sup>」<sup>1)</sup>は日本語の格助詞「～から」あるいは「より」に対応するというように、モンゴル語格語尾に対応する日本語格助詞を個別に提示していくだけでも、モンゴル語格語尾に関する文法概念と用法についての基本的な理解は得られるのである。

しかし、だからといって日本語話者にとってモンゴル語格語尾の習得と運用が容易であるということにはならない。その理由は2つある。第一に、モンゴル語格語尾と日本語格語尾の大きな相違は、モンゴル語格語尾は一つの格が複数の形に変化するという点

である。モンゴル語の格語尾は名詞や動詞(動詞形動詞語尾)に結合するが、その際に母音調和による格の母音変化や、単語末の母音・子音の影響による格の先頭部分の音声変化が生じるのである。さらに第二として、モンゴル語格語尾の表記に際しては、正書法の中の母音挿入および母音削除の規則(母音の挿入・削除の規則)<sup>2)</sup>も関わってくるため、その規則も習得せねばならない。現在モンゴル国で用いられているキリル式モンゴル文字(以下、本稿ではキリル式モンゴル文字は「キリル式文字」と記し、ロシア語表記に用いられるキリル文字全般については「キリル文字」と記す)の表記規則を定めた中心的人物である Ts. ダムディンスレンらは『モンゴル文字規範字典』(以下、本稿では『規範字典』と記す)を著し、モンゴル語語彙の表記規範を明らかにしたが、それによると母音 a・y グループの名詞に主格を除いた基本格語尾 6 種を付加し、さらに母音の挿入・削除の規則が適用された場合の名詞の表記パターンは、計 29 種類にもものぼっている [Дамдинсүрэн ほか 1983 : 380–389]。このことからモンゴル語格語尾の習得が決して容易ではないことが分かるであろう。

筆者は、モンゴル語初級文法の中で、学習者が特に混乱をきたしやすい難関ポイントは 2 つあると考えている。その第一が本稿が扱う格語尾のつくり方に関する規則である。モンゴル語学習者は初級レベルのしかも初期段階で、文の構成要素として不可欠である格語尾を理解し、運用できるようになることが求められるが、上述のように音声変化や正書法に不慣れな初学者にとって決して簡単なことではない。そして第二は、正書法の中心的位置を占める母音の挿入・削除の規則である。モンゴル語初級文法を指導する際には、特にこの 2 点について留意し、学習者の理解促進が効果的にもたらされるよう、文法項目の説明方法および導入順序を工夫する必要がある。こうした理由から、本稿ではモンゴル語格語尾の文法項目を取り上げ、表を用いながら学習者の理解を促進する試みについて論じることとする。

## 2. モンゴル語教育に関する先行研究

現在のモンゴル国(1924 年から 1991 年までの国名はモンゴル人民共和国)で標準語とされているのはモンゴル語ハルハ方言であり、その表記に用いられているのがキリル式文字である。モンゴル国は 1921 年にソ連の国際的政治力を後ろ盾として中華民国からの国家独立をほぼ確立し、ソ連に次ぐ世界二番目の社会主義国としての道を歩み始めた。ロシア語表記に使われているキリル文字を借用することを正式決定したのはその 20 年後の 1941 年のこと<sup>3)</sup>、約 5 年の準備期間を経て、全面的な移行を終えた。それ以前に用いていたウイグル式モンゴル文字(以下、本稿ではウイグル式文字と記す)<sup>4)</sup>には、異なる母音や子音を同一文字で表記し、さらに文語体表記で文字表記と実際の発音との隔たりが大きいという不便さがあった。これに対しキリル式文字では言文一致による表記が可能となり、この新しい文字を採用したことでモンゴル人民共和国では識字率が飛躍的に向上したという肯定的評価がなされている。ところが新たに導入されたキリル式文

字の表記体系にも大きな問題があった。まず第一に、表記の複雑さである。上述した母音の挿入・削除という複雑な正書規則のみならず、格語尾や一部の動詞語尾の表記がそれまでのウイグル式文字よりも複雑化した<sup>5)</sup>。これはキリル式文字が、ウイグル式文字以上に母音調和によって変化する母音を書き分けることが可能となった以上、やむをえない側面もある。しかし、一部の格語尾および動詞語尾の正確な表記には、廃止したウイグル式文字の表記知識が必要とされる<sup>6)</sup>という不合理な要素も含んでいるのである。第二には、ロシア語表記に用いられるキリル文字 33 種(大文字、小文字をあわせて 1 種類と数える)ではモンゴル語の子音および母音の表記に十分でなかった点である。そのため、モンゴル語の基本母音を表記するために 2 種類の文字(大文字 **Ө** と小文字 **ө**、大文字 **Ү** と小文字 **ү**)を創出し、さらに子音については識別母音<sup>7)</sup>という発音しない母音字を表記することで子音字不足を補うというやや複雑な方法を創出した。しかしそれでも文字不足は解消されず、結局、1 文字が複数の母音を表すというウイグル式文字でみられた難点がキリル式文字においても再び生じた<sup>8)</sup>。こうした結果として、キリル式文字の表記体系は複雑化し、外国人学習者はもちろんのこと、モンゴル語母語話者であっても誤表記をする例がしばしば見受けられるのである<sup>9)</sup>。

ここで日本におけるモンゴル語教育史という視点からモンゴル語の文字表記に関連する事項をまとめることとする。歴史的に日本においてモンゴル語教育が開始されたのは 20 世紀初頭のことであった。日露戦争の直前、モンゴル東部地域における影響力の強化を望んだ日本は一部のモンゴル王侯に接近して交流を開始し、社会的近代化を支援する一環として教育分野においても日本語教育や軍事教育を担当する日本人教師を現地へ派遣した。日露戦争終結後の 1906 年には、日本は初めてのモンゴル人留学生を受け入れた。1908 年、東京外国語学校(現在の東京外国語大学)にモンゴル語の速成科が設置され、日本国内において学校教育としてのモンゴル語教育が本格的に開始された。同年、東モンゴル地域で地勢調査活動に従事した陸軍軍人の村田清平が『蒙古語独修』(岡崎屋書店)<sup>10)</sup>という日本で最初となるモンゴル語学習書(会話書)を出版している。その後日本が敗戦を迎える 1945 年までの間に、神戸の二楽荘<sup>11)</sup>、大阪の大阪外国語学校(現在の大阪大学外国語学部)、奈良の天理学校(現在の天理大学)、東京の善隣協会専門学校(後に善隣高等商業学校など校名変更あり)、北京の興亜学院など日本国内外において、日本人学習者を対象にモンゴル語教育が実施された。当時刊行された日本人向けのテキストや辞書などモンゴル語学習教材は、いずれもウイグル式文字あるいはウイグル式文字のローマ字転写によって表記されていた。教材で使用されている語彙や表現をみると、ハルハ・モンゴル語を対象とした教材はわずかで、日本が侵略し、「満蒙」・「興安蒙古」(東部内モンゴル地域をこう呼んだ)、「内蒙古」・「蒙疆」(中部内モンゴル地域をこう呼んだ)と呼んで支配していた現在の中国内モンゴル地域のモンゴル語が大部分を占めていた。1945 年に日本が内モンゴル地域から撤退して以後は、モンゴル人民共和国は 1946 年に中華民国が独立国として正式に承認し、内モンゴル地域は 1947 年に中国共産党によって

内モンゴル自治区として再編成され、続いて 1949 年に中華人民共和国が成立するというように、日本・モンゴル関係およびモンゴル地域内外の情勢は大きく変化した。そうした中で 1950 年代以降における日本国内のモンゴル語教育は、ウイグル式文字表記および内モンゴル地域のモンゴル語ではなく、キリル式文字を採用したハルハ・モンゴル語へと移行した。さらに、1972 年の日本・モンゴル人民共和国間における外交関係の樹立、1990 年のモンゴル人民共和国の民主化を経て、両国の民間および政府間の諸分野における交流は拡大し、ハルハ・モンゴル語が主流であり続けている。

しかしながら、モンゴル語教育の方法論に関する研究は、日本ではこれまでほとんどなされていない。モンゴル語の学習教材の種類が増えつつあることは確かであるが、依然として会話帳や単語帳としての機能が重視され、文法項目の導入から始まってその定着をはかる基本練習、さらには実際のコミュニケーション活動に近い応用練習を行うといった言語習得に力点を置いた語学テキストはまだ多くはないのが実情である。日本語話者に対するモンゴル語教育に関する研究もこれまでなされていないが、筆者の知見の範囲では[吉野 2006, 2007, 2008]のみを先行研究としてあげることができる。それらの中でも[吉野 2007]は、モンゴル語格語尾を取り上げて考察し、新しい教育方法を提起している点で重要である。具体的に述べると、吉野は格語尾 6 項目について『規範字典』に依拠しつつ格ごとに詳細な項目分類を行い<sup>12)</sup>、その後、難易度を 4 段階に分け、その難易度を基準として学習順序を設定するという作業を行った。ただし、吉野の論文では、『規範字典』の名詞格語尾の分類をそのまま外国人に対するモンゴル語教育に用いた結果として、例えば、変化の種類が最も多い属格の場合、接尾法が 16 通りにも及んでいる。これは、格語尾の選定規則と母音の挿入・削除の規則を区別し、選定規則のみを説明している一般のモンゴル語文法書が、属格語尾を 5 通り前後に分類して学習者に提示する方法に比べ、はるかに多い。この『規範字典』の最大の目的は、名詞に格語尾が結合した場合および動詞に接辞が結合した際に母音の挿入・削除に関する正書法規則が適用されるか否か、適用されるのであれば正しいつづりはどう書くかという表記規範をモンゴル語母語者に提示することであつたらう。しかし、外国のモンゴル語学習者にとっては、そうした表記規則の問題以前に、モンゴル語母語者であれば当然自然習得している格語尾の形成時にいかなる形を選定するかという基本的なところから学習する必要がある。格語尾の選定規則と母音の挿入・削除の規則を同時に教示することも不可能ではなからうが、属格だけでも 16 通りに分類された格語尾について具体的にどのような説明方法を用いて学習者に指導するか、吉野の論考ではその点までは詳しく言及されていない。筆者は、格語尾の選定規則の習得と母音の挿入・削除に関する正書法とは個別に扱い、格語尾の選定規則をマスターした後で母音の挿入・削除の規則を取り上げたほうが学習者の負担を軽減し、効率よく学習を進めることができると考えている。

このほか、本稿で考察するモンゴル語教育という立場からではないが、日本語教育の観点からモンゴル語の格語尾もしくはモンゴル語母語者の日本語格語尾の誤用を扱った

研究として、[山口1972, 1978, 1980]、[小林1981, 1983]、[ナラントヤ2006]などがある。また、モンゴル語学の立場からモンゴル語格語尾を対象とした研究として、[島崎1976]、[橋本1987, 2007]、[水野1988, 1993]、佐藤[1997]、[山越2000]などがあげられる。さらにモンゴル語を含むアルタイ諸語と朝鮮語・日本語の文法要素を対照した[風間2003]などもあり、こうした研究成果に含まれる日本語・モンゴル語の格の比較分析がモンゴル語教育においても活用できよう。

### 3. 格語尾の分類とこれまでの学習書における説明方法

モンゴル語では一般的に、次にあげる7格が基本の格語尾とみなされている<sup>13)</sup>。

- (1) 主格(Nominative Case)
- (2) 属格(Genitive Case)
- (3) 対格(Accusative Case)
- (4) 造格(Instrumental Case)
- (5) 奪格(Ablative Case)
- (6) 与位格(与格および位格。Dative-Locative Case)
- (7) 共同格(Comitative Case)

これらのうち、(1)の主格はゼロ語尾であり<sup>14)</sup>、また、(3)の対格はゼロ語尾になる場合と対格語尾が付く場合の両方がある。主格以外の(2)から(7)の6つの格が前に置かれている名詞や動詞に直接結合する。そしてそれらの格語尾はすでに述べたように、日本語のように一つの格は一つの表記と固定しているわけではなく、結合する名詞や動詞の母音・子音の影響を受け、格語尾の母音が交替したり格語尾の先頭部分が変化を起すことがある。学習者はそれぞれの格語尾について基本の形と例外規則が生じる場合、そしてその際の格語尾の形を覚える必要がある。結合時に生じる格語尾の音声変化は以下の5つのパターンに分けることが可能である。

#### (1) 単語との母音調和による格の母音交替

格が結合する単語の母音構造が男性語／女性語の二タイプのいずれか、もしくは男性語 **a・y** グループ／男性語 **o** グループ／女性語 **э・ү** グループ／女性語 **e** グループの四タイプのいずれかによって、格の母音が母音調和の影響により2～4種のうちで交替変化を起す(属格、対格、造格、奪格、共同格)

#### (2) 語末の短母音、軟音記号の欠落

格が結合する単語の語末が短母音の場合に、それが欠落する(属格、対格、造格、奪格)。ただし、単語の語末が母音-иあるいは軟音記号-ьの場合はそれが欠落した後で、格の基本形が長母音 **ы**／**ий** 始まりであれば男性語であっても長母音 **ий** 始まりに変化し(属格、対格)、格の基本形が長母音 **aa**<sup>4</sup> 始まりであれば二重母音 **иа**<sup>4</sup> に変化する(造格、奪格)。

#### (3) 語末の子音の影響による格のトップの母音・子音の変化

格が結合する単語の語末が-г, ж, к, ч, ш で終わる男性語の場合、格の先頭部の長母音 **ы** が **ий** へと変化する(属格、対格)。また、単語の語末が-н あるいは「隠れた н」(「不定の н」ともいう)で終わる場合、-ын / -ийн ではなく長母音-ы / -ий のみを付ける(属格)。さらに、単語の語末がある特定の子音の場合、格の先頭部の子音が変化する(与位格)。

(4) 語末の母音の影響による格のトップの **ы** / **ий** の欠落、子音 **г** の発生

格が結合する単語の語末が長母音、二重母音、固有名詞・外来語の母音(短母音・長母音・二重母音を問わない)の場合に、格の基本形の先頭部の長母音 **ы** / **ий** が欠落するか(属格、対格)、もしくは格の先頭部に子音 **г** が発生する(属格、造格、奪格)。

(5) 隠れた н、隠れた г の発音化

格が結合する単語の語末に「隠れた н」が含まれる場合、それが発音化される(属格、奪格、与位格)。また、単語の語末に「隠れた г」(「不定の г」ともいう)が含まれる場合、それが発音化される(属格、造格、奪格)。

モンゴル語格語尾のこうした変化パターンは 6 つの格の間で統一性がみられず、それぞれが異なる変化パターンを有しているため、学習者は格一つ一つの基本形と例外項目を覚えていくほかない。主格を除いた 6 つの格語尾のうち、こうした音声変化が最も少ないのは共同格で、上にあげた(1)のみが適用される。音声変化が最も多いのは属格で、(1)から(5)までのすべてが適用される。これまでに刊行されたモンゴル語学習書において、こうしたモンゴル語の格語尾をどのように教えてきたかを概観すると、3 通りに分類することが可能である。第一は、かなり簡略化し、格語尾の基本形のみ(例えば属格であれば男性語接続の-ын と女性語接続の-ийн)を教えるにとどめ、例外規則は一切省略してしまう説明である。これはモンゴルへの旅行者を学習者として想定したモンゴル語会話書に多く見られ、文法は文構造の簡略な説明にとどめ、場面別会話に重点を置いている。第二には、基本規則に加え、例外規則も教えるが、一部の例外事項については省略してしまう説明方法である。長母音-ий で終わる語の属格形は「-н」を付すという説明を省略して長母音終わりの語には「-гийн」を付けるとのみ記した説明<sup>15)</sup>、男性語で語末が-к 終わりの単語の属格形が-ын ではなく-ийн、対格形が-ыг ではなく-ийг となる規則<sup>16)</sup>について言及しないモンゴル語学習書もみられる。第三は、基本規則はもちろん例外規則までを網羅した説明で、それを習得すれば格語尾のつくり方を一通り運用できるものである。筆者は、上に述べた第三の立場であり、モンゴル語の格語尾規則がやや複雑であるにしても、規則までも含めて一通り説明すべきであると考えている。

#### 4. 学習方法

次に、これら 6 つの基本格語尾の学習に際しての導入順序について、筆者の考えを述べることにする。すでに述べたように、モンゴル語の格語尾は母音調和の規則によって母音交替が生じる。そのためまず最初に、格語尾という新しい文法項目を導入する時点

で既習であるはずのモンゴル語の母音体系に関する規則を再確認しておく必要がある。それは以下の2点であり、括弧内は学習者が間違いやすいため特に留意すべき事項である。

(1) 男性語・女性語の区別、母音調和の規則の正しい理解(男性母音あるいは女性母音を含まず、母音は中性短母音 **и** あるいは中性長母音 **ий** のみからなる語が、女性語 **э・ү** グループ扱いとなること)

(2) 母音配列の規則に関し、男性語であれば **а・у** グループか、**о** グループかを正しく判別できること。女性語であれば **э・ү** グループか、**ө** グループかを正しく判別できること(軟母音 **я、ю、ё、е、ю** を含む語および外来語がいずれのグループに属するか) 次の項目については、既習であれば正しく理解できているかを確認し、未習であればここで新たに導入すべき文法事項である

(3) 隠れた **н** をもつ名詞<sup>17)</sup>について

(4) 隠れた **г** をもつ名詞<sup>18)</sup>について

これら4つの文法事項について復習あるいは新たな導入を終え、その後でモンゴル語格語尾の本格的な説明に入る。筆者は、6つの格語尾について一つずつ表にまとめ、それを用いて発音・表記の基本および例外事項を具体的に単語をあげながら説明する方法が、学習者にとって最も理解しやすいと考えている。なお、この時点では格語尾の形成の仕方を習得することに専念できるよう、母音の挿入・削除の規則が適用される語彙は意図的に除外してしまうのが妥当である。取り上げる格の順序は、変化の種類が少ない格からとし、まずは共同格から始める。次に、格語尾の母音交替はみられないが、隠れた **н** 終わりの名詞および **г・р・в・с** 終わりの名詞の一部に付く場合に変化が生じる与位格<sup>19)</sup>を説明する。その後は、造格、奪格、基本形が男性語・女性語で異なる対格、最後に変化の形が最も多様な属格という順序である。これらの格を一つずつ解説する例として、本稿では属格のみをあげる。

属格：「～の」

基本	男：-ын	基本形	гар「手」→гарын
	女：-ийн		улс「国」→улсын
			ял「罪」→ялын
			гол「川」→голын
			ёр「前兆」→ёрын
			гэр「家」→гэрийн
			үд「昼」→үдийн
			бие「体」→биеийн
			өөр「自分」→өөрийн

			ер 「一般」 →ерийн 中：шил 「ガラス」 →шилийн [語末の短母音は落とす] чоно 「狼」 →чонын эрдэнэ 「宝石」 →эрдэнийн
例外1	-ийн	(1) 語末が-и、ьの後 [и、ьを落として] (2) 男性語で語末が-г、ж、к、ч、шの後	1) сургууль 「学校」 →сургуулийн 2) багш 「先生」 →багшийн
例外2	-н	(1) 語末が二重母音の後 (2) 語末が長母音-ийの後	1) нохой 「犬」 →нохойн 2) дэлхий 「世界」 →дэлхийн
例外3	-гийн	(1) 語末が-ий以外の長母音の後 (2) 固有名詞・外来語で語末に短母音がある [短母音は残して] (3) 隠れたгを持つ語の後 [гが現れて]	1) дүү 「弟妹」 →дүүгийн 2) Осака 「大阪」 →Осакагийн 3) шуудан(г) 「郵便」 →шуудангийн
例外4	男：-ы ----- 女：-ий	н 終わりの語の後	охин 「娘」 →охины ----- хүн 「人」 →хүний
例外5	男：-ны ----- 女：-ний	隠れた н をもつ語の後 [нが現れて]	кино(н) 「映画」 →киноны ----- ширээ(н) 「机」 →ширээний

属格の格語尾の形は上の表の通りである。「基本」と書かれているのは属格の基本の変化形がこの形であるため、「男」、「女」と分けているのは、男性語に結合する場合と女性語に結合する場合とで異なる格語尾を用いるためである。基本の女性語の中に「中」とあるのは中性母音のみが含まれる語の場合で、女性語扱いとなる。右側にはそれぞれの属格形の例を一つずつあげている。「[語末の短母音は落とす]」というのは、モンゴル語においては母音3つが連続して現れることはありえず、属格、対格、造格、奪格の結合時には語末の短母音は欠落させるという決まりがあるからである。しかし、例外3の(2)にあるように、固有名詞および外来語の場合には、語末の短母音は欠落させずに保持し、代わりに属格語尾は-гийнを付加する。例えば、**Осака**「大阪」の属格形は**Осакагийн**が正しく、**Осакын**にならないということである。

例外5の「隠れた н をもつ語の後 [нが現れて]」という部分については、追加説明が必要である。属格形成時には隠れた н が現われて-ны/-нийの形をとるのであるが、



これには「例外の例外」というべき規則も存在するのである。隠れた **н** を有するにもかかわらず、属格形のみに限って **н** が現れないという名詞が存在する。一般的には隠れた **н** をもつ名詞は属格形、奪格形、与位格形の 3 つの格語尾において、隠れた **н** が現れる(例: **ус(ан)**「水」の属格形は **усны**、奪格形は **уснаас**、与位格形は **усанд**)。しかし、一部の名詞は隠れた **н** をもち、奪格形と与位格形においては通常どおり隠れた **н** が現れるのであるが、属格形のみ隠れた **н** が現れない(例: **уул(ан)**「山」の属格形は **уулын** で **н** が現れた **уулны** にならないが、奪格形は **уулнаас**、与位格形は **ууланд** といずれも **н** が現れる)。隠れた **н** を有する名詞のこうした例外的な属格変化についても、ここで説明する必要がある。

モンゴル語の属格は、日本語の連体修飾の働きを示す格助詞(もしくは連体助詞)「の」と基本的に対応する。ただし、「弟のドルジ」、「首都のウランバートル」といった日本語の「同格」を表わす用法はモンゴル語属格には存在しない。こうした日本語格助詞とモンゴル語格語尾との対応関係の概要についても、表にまとめて学習者に提示することにより理解を促進できると考え、表を作成した。その表は拙稿末に「表 1: 日本語・モンゴル語の格の用法比較」としてあげている。この表を見れば、日本語の格とモンゴル語の格とが基本的に対応関係にあること、しかし、一部の意味的用法においては異なる格が要求されることが分かるであろう。例えば日本語格助詞「を」とモンゴル語対格とを比較すると、「橋を渡る」や「空を飛ぶ」など「通過点」を示す日本語格助詞の「を」はモンゴル語では対格ではなく造格を用いること、あるいは「バスを降りる」や「家を出る」など「離れる対象」を示す「を」はモンゴル語で奪格を用いることなどを容易に理解できるはずである。こうした相違は日本語話者がモンゴル語を話す際に母語干渉による誤用が生じやすいポイントであるから、教授者は特に説明に留意する必要がある。このほか、動詞や後置詞の中には、前に置かれている名詞などに結合する格を支配し、特定するものもある。それらもまた日本語とモンゴル語で用いられる格が相違し、学習者にとって母語干渉による誤用を招きやすくなる。例えば、「先生に尋ねる」はモンゴル語で奪格を用いて「**багшаас асуух**」(下線部が奪格)、「歴史について」は属格を用いて「**түүхийн тухай**」(下線部が属格)と言い表す<sup>20)</sup>。なお、こうした日本語・モンゴル語間の格の相違は、日本語を学習するモンゴル語話者にとっても日本語の誤用をもたらす要因となっており、モンゴル語話者に対する日本語教育の方面からも研究を進めることが必要であろう。

このようにモンゴル語の格語尾一つ一つの作り方を説明し、日本語格助詞との対応関係の異同を明らかにしたあとで、改めてモンゴル語格語尾の作り方について全体的な理解の整理を行うため、格語尾の作り方をまとめた表を用いる(拙稿末に「表 2: モンゴル語の格語尾一覧表」としてあげた)。この表はゼロ語尾である主格を除いた 6 つの基本格語尾の作り方の規則を 1 つの表の中にまとめたものである。横には、モンゴル語格語尾の作り方が左から複雑な順に、「属格」、「対格」、「造格」、「奪格」、

「与位格」、「共同格」と並んでいる。縦に見ると、まず各格語尾の日本語の意味が記され、次に、格語尾の基本形を示している。その下の 5 項目は、接続する単語の末尾が主として母音の際の例外規則が並んでいる。すなわち、母音 **и** および軟音記号 **ь**、二重母音、長母音、固有名詞・外来語における短母音である。一つの表の中に、6 つの格語尾の規則をコンパクトにまとめたことで、モンゴル語格語尾の全体像を整理して理解でき、ほかの格との共通点や相違点までも把握しやすくなる。例えば、隠れた **н** をもつ名詞で隠れた **н** が現れるのは属格、奪格、与位格の 3 つの格においてであること、造格と奪格のつくり方の違いは隠れた **н** をもつ名詞の奪格形において隠れた **н** が現れるという一点のみであることなどがこの表を見れば一目瞭然であり、それまで格の個別説明の段階では気づいていなかった事項もこの表を見ることで新たな気づきも生まれるであろう。学習者はしばらくはこの表を見ながら格語尾をつくる練習や、モンゴル語文章の読解時に語の末尾にいかなる格語尾が付着しているかを見極める練習を行い、この表に記されている項目がすべて頭の中に入った時点で、格語尾のつくり方を一通り習得できたと言える。

その後は、こうしてモンゴル語格語尾のつくり方に関する文法項目を習得した後で、「はじめに」で言及した母音の挿入・削除の規則の習得に移行し、格語尾形成時にこの規則が適用されるパターンを理解していく。この二つが習得できたならば初級レベルにおける難所は無事に通過しており、母音調和の規則、母音配列の規則、そして母音の挿入・削除の規則の理解が同様に要求される動詞語尾の結合を学ぶ際には、それほど戸惑うこともなく理解できるであろう。そしてここから本格的に学習者は会話、読解、聴解、作文の各技能と結びついた幅広いタスクをこなし、実用的な言語コミュニケーション能力を養成していくのである。

## 5. おわりに

以上、日本語話者がモンゴル語格語尾を効果的に習得する方法に関する試論を述べた。モンゴル語教育に関する研究は、日本においてもまた世界的に見てもこれまであまり進められてこなかった。しかし、モンゴル語を対象とした語学教育についても考察を行い、体系的な教育方法を築いていくことは今後の重要な課題である。そのためには、日本語とモンゴル語の格の比較など、両言語の比較考察も同時に進められねばなるまい。教授者はそうした文法知識を活用しつつ、学習者の理解を促進させるため工夫をこらしながら独自の効果的な授業方法を編み出していくべきであろう。

表 1：日本語・モンゴル語の格の用法比較

格	意味	日本語例文	モンゴル語
が	①動作主	バートルがパンを食べた	主格(ゼロ語尾)
	②状態・現象・存在・変化などの主体	雪が降っている／教室に人がいる 火が消える／花がきれいだ	
	③対象[=を③]	彼女は歌が好きだ／コーヒーが飲みた い／犬がこわい	「が好きだ」、「が上手だ」：与位格 「がVたい」、「がほしい」：対格 「がこわい」：奪格
			<名詞修飾節の中の主語(例：「母が(=の)作った料理」)は常に属格形。従属節が副詞節や引用節の主語を示す「が」は、対格形>
の	①所有・所属	図書館の本	属格
	②動作の主体	先生の話	
	③動作の対象	車の修理	
	④場所	モンゴルの友人	
	⑤時	夏の空	
	⑥位置	机の上	<前の名詞が隠れた н を有する場合は н の出現、н の出現+属格で意味の違いが生じる(例：ширээ(н)「机」+дээр「上に」→ширээн дээр「机の上(表面)に」、ширээний дээр「机の上のほうに」)。隠れた н を有さない場合は属格形>
	⑦素材	金の指輪	<属格は用いず、前の素材に当たる名詞が隠れた н を有する場合は н が現れ、有さないならそのまま二語で複合語を形成。үнэгэн малгай「キツネの(キツネ毛の素材の)帽子、үнэгний малгай「キツネの(キツネがかぶる)帽子」>
	もの・人の状態	病気の人	属格(өвчний хүн「病気の人」)、所有接尾辞(өвчинтэй хүн「病気を有する人」)
	⑧同格	弟のドルジ／首都のウランバートル	格不要
⑨数量	一杯の水	格不要	
を	①動作の対象	本を読む	<通常ゼロ語尾。ただし、目的語を明確化する際には対格が用いられる>
	②経過する時間	夏休みをハワイで過ごす	
	③願望・可能・好悪の対象[○が③]	水を飲みたい／日本語を話せる	
	④動作の方向	下を見る／後ろを向く	格不要(доошоо「下を、下へ」、хойшоо「後ろを、後ろへ」)
	⑤通過点	橋を渡る／空を飛ぶ	造格
	⑥離れる対象[△から①]	バスを降りる／家を出る	奪格
で	①手段・道具・方法	バスで行く／日本語で書く	造格
	②まとめり	一人で夕食を食べる	
	③動作主	みんなで世話をする	
	④材料[△から⑧]	紙で人形を作る	

	⑤範囲・範囲の限定	1日で仕事を終える／5時で締め切る	造格、与位格	
	⑥原因・理由	大雪で電車が止まる	造格、与位格、奪格	
	⑦動作・行事・状態の場所[×に①]	図書館で勉強する／日本で一番高い山	与位格	
か ら	①時間・場所の起点 [場所の起点：△を⑥]	9時から始まる バスから降りる	奪格	
	②動作の主体となる人[△に①]	その話は田中さんから聞いた		
	③抽象的な起点	失敗から学ぶ		
	④順序・範囲の始点	発表者は100人から選ばれた		
	⑤変化前の状態	信号が赤から青に変わる		
	⑥判断の根拠[○で⑥]	調査結果から分かる		
	⑦原因・遠因	火の不始末から火事になる		
	⑧材料[△で④]	このチーズは牛乳から作る	造格	
	⑨経由点	窓から捨てる	<奪格には「～の一部を」の意味もある (例：ЭНЭ МАХНААС АВАХ 「この肉(のうちの肉の一部)を買う」)>	
よ り	①比較の対象	大阪は名古屋より大きい	奪格	
に	①存在の場所[×で⑦]	会社にいる／図書館に新聞がある	与位格	
	②到着点・帰着点	家に帰る／会議に出席する		
	③行為の対象	人に頼る		
	④動作の受け手	友達にメールを書く／犬にエサをやる		
	⑤原因・理由	恋に悩む／酒に酔う		
	⑥移動の方向	大阪に向かう／私の方に来る		
	⑦動作・作用の時間	7時に起きる、1990年に生まれた	ゼロ語尾+болох 「になる」	
	⑧割合の分母	3日に1度／50人に1人		
	⑨変化の結果[=と⑤]	教師になる／信号が赤に変わる		
	⑩目的	買い物に行く／遊びに来る		造格
	⑪出どころ[=から②]	父に本をもらう／先生に聞く		奪格
	⑫状態の対象	駅に近い／水に耐える		
と	①共同動作の相手	先生と会う／休日を家族と過ごす	共同格	
	②動作の対象	彼女と結婚する／父と約束する		
	③対立的な対象	病気と闘う／敵と戦う		
	④異同の対象	本物と似ている／実物と異なる	「似ている」：共同格／「異なる」：奪格	
	⑤変化の結果[=に⑨]	社会人となる	ゼロ語尾+болох 「になる」	

			<共同格形と同形の所有接尾辞「～を有して(いる)、～を伴って(いる)」もある(例：монгол хэлтэй хүн「モンゴル語を有している(モンゴル語ができる)人」、бороотой өдөр「雨を有する(雨の日)、машинтай очих「車を伴って(自分の車で)行く」)
--	--	--	---

表 2：モンゴル語の格語尾一覧表

a<sup>4</sup> : a,ə,o,ө / a<sup>3</sup> : a,э,o

	前にある単語の末尾	属 格	対 格	造 格	奪 格	与 位 格	共 同 格
		～の	～を	①～で、～によって [手段・方法] ②～を通つて[場所] ③～頃に[時間]	～から ～より	①～に、～で[場所] ②～に[人・動物] ③～に[時間]	～と(ともに) <～を有して(いる)、～を伴って(いる)>
基 本		男：-ын ----- 女：-ийн	男：-ыг ----- 女：-ийг	-аар <sup>4</sup>	-аас <sup>4</sup>	-д	-тай <sup>3</sup>
	[語末の短母音は落とす]	○	○	○	○	×	×
例 外	-и,ь [и,ьを落として]	-ийн	-ийг	-иар <sup>4</sup>	-иас <sup>4</sup>		
	二重母音	-н					
	長母音 [-ийのみ]						
	長母音 [-ийを除く]	-гийн	-г	-гаар <sup>4</sup>	-гаас <sup>4</sup>		
	固有名詞・外来語で語末に母音がある[母音は残して]						
	隠れたгを持つ[гが現れて]						
	男性語で-г, ж, к, ч, ш	-ийн	-ийг				
	-н	男：-ы ----- 女：-ий					
	隠れたнをもつ[нが現れて]	男：-ны ----- 女：-ний			-наас <sup>4</sup>	-нд	
	-г, рの大部分						-т
-в, сの一部							

## 注

1. モンゴル語の基本母音7つのうち **a・y・o** は男性母音、**э・γ・ө** は女性母音、**и** は中性母音と呼ばれ、原則として一つの単語中に男性母音と女性母音は混在しない(母音調和の規則)。また、男性母音は **a・y** グループと **o** グループ、女性母音は **э・γ** グループと **ө** グループに分けられ、1つの単語中では **a・y** の後に **o** は現れないもしくは **o** の後に **a** は現れないなどの決まりがある(母音配列の規則)。格語尾の母音はこの2つの規則により決定される。奪格の基本形(-**аас**<sup>4</sup>)および造格の基本形(-**аар**<sup>4</sup>)に右上に数字の4が記されている理由は、例えば奪格「-**аас**<sup>4</sup>」は「-**аас**／-**оос**／-**ээс**／-**өөс**」の4通りのいずれかで、男性母音 **a・y** グループなら-**аас**、男性母音 **o** グループなら-**оос**、女性母音 **э・γ** グループなら-**ээс**、女性母音 **ө** グループなら-**өөс** を用いるという意味である。共同格に限っては-**тай**<sup>3</sup>となり、男性語 **a・y** グループは-**тай**、男性語 **o** グループは-**той**、女性語は **э・γ** グループか **ө** グループかを問わずすべて-**тэй** を結合させる。

2. キリル式モンゴル文字は格語尾、再帰語尾、複数語尾、動詞接辞などが結合した際に、子音の種類あるいは子音の連続状況により、母音を付加もしくは削除せねばならない母音の挿入・削除の規則がある。この規則はモンゴル語の読み書きには必要不可欠な知識であるが、やや複雑であることから、モンゴル語学習書でこの規則を取り上げているものは多くない。しかし、この規則を未習のままだと、本来ないはずの母音が表記されていたり本来あるべき母音が欠落している理由が理解できず、自分で辞書を引いて単語の意味を調べることも困難になる。

例えば、「モンゴル語を初級から独習できるよう十分配慮し、作成された」[塩谷ほか 2001 : i]というモンゴル語初級文法書[塩谷ほか 2001 : 43]では、名詞の複数語尾の説明として、名詞に-**ууд** や-**д** を結合して複数形をつくらせると述べた後、その例として「**зураг**《絵》→**зургууд**《絵(複数の)》」、「**зураач**《画家》→**зураачид**《画家たち》」という語をあげている。前者で母音 **a** が欠落し、後者で母音 **и** が挿入されているのは、それぞれ母音削除の規則と母音挿入の規則が適用されたためであるが、同書ではこうした正書規則について一切言及していないことから、何も知らない学習者がこうした場面で戸惑うことは十分予想される。

また[金岡 2009]では、前書きの中で正書法の母音削除に関する規則を簡略に説明し、「語幹という本来は変化してはいけないところのつづりを変えてしまうこの規則は決してよいものとはいえず、しかも例外規則もあるのでわかりにくくなっています。将来、モンゴル人の手によって改正されることが望ましいのですが、現時点では少々煩雑な規則があることだけは覚えておいてください」[金岡 2009 : 32] と、学習者に注意を促すにとどめるという方法を用いている。

3. ソ連領内に居住する同じモンゴル系民族であるカルムイク共和国とブリヤート共和国においても、それぞれ 1930 年代末にキリル文字によるモンゴル語表記へと移行した。モンゴル人民共和国がキリル文字表記を採用するに至る経緯も、これら両共和国同様にソ連の意向が強く反映していた。

4. ウイグル式文字は、中国内モンゴル自治区を中心とする中国国内に居住するモンゴル民族の間では今日に至るまで使用され続けている(新疆ウイグル自治区ではウイグル式文字を改良したトド文字も使用されている)。内モンゴル自治区では1950年代半ばにキリル式文字への移行作業が進められたが、中ソ対立の影響により内モンゴル自治区とモンゴル人民共和国の間の交流が警戒・制限された結果、再びウイグル式文字の使用に戻された。さらにモンゴル人民共和国では、1990年の民主化以降にキリル式文字の使用をやめてウイグル式文字へ戻す動きも起こったが、現在ではウイグル式文字は学校教育の中で知識として教えるにとどまり、完全実用化の方向には向かっていない。なお、モンゴル人民共和国がキリル式文字を採用した際、それに対抗し、満洲国においても文字改良が検討されたが、満洲国の瓦解により中止となった[神尾1983:105]。

5. ウイグル式文字での格語尾は、通常は語の後ろに分離して表記される。属格の表記は **yin**、**un** / **ün**(表記は同一)、**u** / **ü**(表記は同一)の3種類、対格は **yi**、**i**の2種類、造格は **bar** / **ber**(表記は同一)、**iyar** / **iyer**(表記は同一)の2種類、奪格は **ača** / **eče**(表記は同一)の1種類、与位格は **tai** / **tei**(表記は同一)の1種類のみで、キリル式文字に比べ少ない。

6. **г**、**р**、**в** で終わる名詞に与位格語尾 **-д** / **-т** を付ける場合、原則としてウイグル式文字で語末に母音を有するか否かにより表記が異なる(例: ウイグル式文字で語末に母音を有する名詞には **нэг** 「一」→**нэгд** 「第一に」、**нэр** 「名前」→**нэрд** 「名前に」、**аав** 「父」→**аавд** 「父に」というように **-д** が付く。母音がない名詞の場合、**цаг** 「時」→**цагт** 「時に」、**гэр** 「家」→**гэрт** 「家に」、**сэдэв** 「テーマ」→**сэдэвт** 「テーマに」というように **-т** が付く)。動詞語幹に結合・並列の副動詞語尾 **-ж** / **-ч**(日本語の動詞テ形あるいは「マス形からマスを取った形」に相当)を接続する場合にも、ウイグル式文字で語幹末尾に母音を有するか否かで表記が異なることがある(例: ウイグル式文字で語末に母音を有する動詞語幹には **явах** 「行く」→**явж** 「行って」というように **-ж** が付く。母音がない場合には **авах** 「取る」→**авч** 「取って」というように **-ч** が付く)。こうしたキリル式文字の正しい書き分けにはウイグル式文字の知識が不可欠となる。

7. 識別母音とは、**-на<sup>4</sup>**あるいは**-га** / **-го** で終わる単語末尾の母音を指す。この母音は発音する母音ではなく、直前の子音 **н** の音が軟口蓋鼻音[ŋ]ではなく歯茎鼻音[n]であること、子音 **г** の音が軟口蓋破裂音[g]ではなく口蓋垂破裂音[ɣ]であることを示している。

8. 具体的には、**ю** が男性軟母音[jo]と女性軟母音[ju]の2つの音声を表わす。また、**е** は女性軟母音[je]、女性軟母音[jø]、外来語表記の[e]という3つの音声を表わす。

9. 現在ではキリル式文字モンゴル語のウェブサイトやブログの数も多くなり、検索サイトを用いて正書法のつづり間違いの事例や程度を把握することが可能である。例えば、母音挿入の規則

の例外事項(本来であれば母音を挿入すべきところだが、例外的に母音挿入をしない規則が適用される場合)を含む **уншсан**「読んだ」を **уншисан** と誤記した例をグーグルで検索してみると、前者の正しい表記が736万件に対し、後者の誤記は5万8300件ヒットした(2010年7月1日時点)。このことからキリル式文字が表記間違いをしやすい複雑な規則を有することは分かるであろう。ただし、こうした表記間違いは正書法の複雑さに加え、大衆レベルでの文字使用の歴史が比較的浅いことや方言の多様性のため表記の揺れが存在し許容される場合もあること、さらには“**буруу бичиж зөв ойлгох**(書き間違えて正しく理解する)”という慣用表現が存在することに象徴されるようにモンゴルでは文字表記の誤りにやや寛容でもあることも考えられる。

10. 同書は国立国会図書館の「近代デジタルライブラリー」に含まれており、デジタル画像で閲覧が可能である。

11. 二楽荘とは、西本願寺法主・大谷光瑞が1907年に神戸の六甲山麓に建てた別荘。

12. 『規範字典』が名詞の格語尾結合の表記パターンを計29パターンに分類していたのに対し、吉野は語末が長母音かつ隠れた **н** を有さない名詞(例として **саа**「麻痺」をあげている)を追加し、計30パターンに分類している。

13. この7つの格以外に、方向格(Directive Case。「～のほうへ」)。**руу**/**рүү**、**луу**/**лүү**のいずれかを分離して後置。例：**Япон руу явах**「日本へ行く」、欠格(Abessive Case。「～なしの、～なしに、～のない」)。**-гүй**を結合。例：**хичээлгүй өдөр**「授業のない日」)なども存在する。

14. 例えば、**Баатар талх идсэн**。(Баатар「バートル」(人名)、**талх**「パン」、**идсэн**「食べた」)で「バートルが[主格：ゼロ語尾]パンを[対格：ゼロ語尾]食べた」、**Цас орж байна**。(цас「雪」、**орж**「降って」、**байна**「いる」)で「雪が[主格：ゼロ語尾]降っている」という文になる。

15. 例えば[塩谷ほか 2001: 26, 27]では、語末が長母音の属格形は「-гийн」を付けるとのみ記されている。この説明に従った場合、学習者は例えば **дэлхий**「世界」の属格形を **дэлхийгийн**、**мэлхий**「蛙」の属格形を **мэлхийгийн** としてしまうが、正しくは **дэлхийн**「世界の」、**мэлхийн**「蛙の」である。

16. 例えば、**марк**「切手」の属格形は **маркын** ではなく **маркийн**、対格形は **маркыг** ではなく **маркийг** となる。

17. 一部の名詞は語末に隠れた **н** を有し、格語尾の属格・奪格・与位格が結合する場合や後ろに **дотор**「中に」・**дээр**「上に」などの後置詞をとまなう場合において、その **н** が現れる。隠れた



н を有する単語の表記は語末に「(н)」を付けた形で記される(例: **ямаа(н)**「山羊」)。ただし、母音挿入の規則によって語末の子音 н の前には必ず母音が置かれるため、母音が存在しない場合には母音も挿入される(例: **мах(ан)**「肉」)。あるいは語末が軟母記号 ь の場合には母音 и に変化する(例: **хонь(хонин)**「羊」)。

18. н で終わる名詞の中には語末に隠れた г を有し、軟口蓋鼻音[ŋ]を表わす語が存在する。表記は単語の末尾に「(г)」を付けた形で記される(例: **шуудан(г)**「郵便局」、**байшин(г)**「固定家屋」)。

19. 語末が г・р・в の名詞に与位格語尾-д が付くか-т が付くかは注 6 で述べた通りである。また、語末が с の名詞の場合、基本的には-т が付き、後ろが с の二重子音で終わっている場合には-д が付く(母音挿入の規則により-ад<sup>4</sup>になる)ことが多い(例: **эцэс**「終わり」→**эцэст**「終わりに」、**улс**「国」→**улсад**「国に」)。

20. 後置詞および動詞による格支配の例は[東京外国語大学: 項目別復習コース Lesson03—Step5・Step6]を参照。

#### 参考資料

- 風間伸次郎(2003)「アルタイ諸言語の 3 グループ(チュルク、モンゴル、ツングース)、及び朝鮮語、日本語の文法構造は本当に似ているのか—対照文法の試み」、アレキサンダー・ボビン、永田俊樹・共編『日本語系統論の現在』国際日本文化研究センター
- 金岡秀郎(2009)『実用リアル・モンゴル語』明石書店
- 神尾弑春(1983)『まぼろしの満洲国』日中出版
- 小林幸江(1981)「モンゴル人に対する日本語教育の研究」『東京外国語大学外国語学部 附属日本語学校 日本語学校論集』8、pp. 25—38
- 同上(1983)「モンゴル人学習者の作文にあらわれた誤用例の分析」『東京外国語大学 外国語学部附属日本語学校 日本語学校論集』8、pp. 44—132
- 佐藤暢治(1997)「モンゴル語の移動動詞」『西日本言語学会』26、pp. 59—68
- 塩谷茂樹、E. プレブジャブ(2001)『初級モンゴル語』大学書林
- 島崎淳彦(1976)「ハルハ・モンゴル語の instrumental 機能について」『岐阜経済大学論集』10—4、pp. 47—78
- ナラントヤ(2006)「モンゴル語の主題小辞“bol” “ni”」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』6、pp. 23—39
- 橋本邦彦(1987)「対格の目的語の意味論と機能論」『モンゴル研究』(日本モンゴル学会)18、

pp. 94-113

- 同 上(2007)「モンゴル語の目的語節の統語論」『室蘭工業大学紀要』57、pp. 25-36
- 水野正規(1988)「モンゴル語の従属節の主語にあらわれる対格形について」『東京大学言語学論集' 89』、pp. 293-300
- 同 上(1993)「現代モンゴル語文法研究の問題点」『日本モンゴル学会紀要』24、pp. 1-10
- 山口幸二(1972)「日本語の格的表現における諸問題 I」『日本語・日本文化』(大阪外国語大学研究留学生別科)3、pp. 62-101
- 同 上(1978)「<従属句>に於ける格表現について」『日本語・日本文化』(大阪外国語大学研究留学生別科)7、pp. 43-56
- 同 上(1980)「モンゴル語の「格」の表現」『日本語・日本文化』(大阪外国語大学研究留学生別科)9、pp. 19-32
- 山越康裕(2000)「モンゴル語の語末に見られる「不定の n」について」『地域文化研究』(東京外国語大学)3、pp. 109-123
- 吉野耕造(2006)「現代モンゴル語文法の語学教育学的一考察——付属語接尾法を中心として——」『語学教育研究論叢』23、pp. 191-214
- 同 上(2007)「現代モンゴル語文法の語学教育学的一考察(2)——格語尾接尾法要素分析と段階的学習を中心として——」『語学教育研究論叢』24、pp. 169-190
- 同 上(2008)「現代モンゴル語文法の語学教育学的一考察(3)——動詞語尾接尾法構成要素分析と段階的学習を中心として——」『語学教育研究論叢』25、pp. 237-260
- Ц.Дамдинсүрэн, Б.Осор(1983) “*Монгол Үсгийн Дүрмийн Толь*” Улаанбаатар  
東京外国語大学言語モジュール・モンゴル語・文法モジュール <http://www.coelang.tufs.ac.jp/modules/mn/gmod/index.html> (アクセス日: 2010年7月1日)